

内外交差点

形而上「タイムトラベル」の薦め 自分の人生、自分に賭けよう

大岡 理人氏（南タクシー社長） 第11/12回

いま見頃の大阪城梅林をじっと黙って見る。「外堀だけでなく内堀まで埋め、家康また来るは必定。幸村、決死の覚悟で戦います」という声と姿が見えてくる。冬の陣、続く夏の陣のような記録された歴史よりも、語られざる、記録されざる歴史を思い描き100年単位の人類衰勢を見る。ペルーやギリシャであればマチュピチュやアクロポリスよりも、周辺の人寂しい遺跡が尚良い。そこで2時間黙って座りながら1000年単位のタイムトラベル。自宅に居ながらも自分史を書けば時間旅行ができる。就活ではなく終活の自分。書くことなんて無いとはじめは皆言う。

本コラム1800字も無重力で書く私には結構大変。社会人向け大学では自分史を書いて読み合う講座もあり興味深い。還暦超世代は満月をみれば、「あの時（1970年、大阪万博で）月の石を3時間も並んで見たなあ」と思うのだろうか。あるいはアポロ宇宙船の月面着陸を思う。宇宙の大部分が虚無に呑みこまれたように歴史の大部分もまた虚無に呑みこまれるといえよう。「神は光あれと言った。すると光があった」という創世記の始まりは、科学言説でいえば光のビッグバンである。その冷却過程の物質進化の頂点で生命が生まれ、進化し、その頂点で人間が生まれた。2026年には「アルテミス計画」のもと、日本人宇宙飛行士が「月面探査車」（JAXA、トヨタ、ブリヂストン等が開発中）で月面に挑む。アルテミスとはギリシャ神話の狩猟と月の女神でありアポロンという双子の弟がいる。アルテミス像を見れば、実際の神殿にあった巨大な女神像の縮小コピーにもかかわらずその魔術的吸引力に驚愕する。神殿は柱1本しか残っていないが往時は同じ柱が127本、古代最大級の神殿であった。宇宙とタクシーをつなげるトピックなんて無いようだが、ある。エムケイの宇宙船ショートムービー（約10分）であり、これは必見。40億年前には地球と同じ環境であった火星には宇宙人がいるかもしれない。

地球に話を戻す。先月の阪神・淡路大震災30年追悼式で石破氏は神戸に行かず。防災省設立案を披露する絶好の機会を逸した。日米首脳会談ではトランプ氏の

冗談に冗談で返し、「敬愛する閣下」（英訳されず…）ではなく「セニョール・プレジデンテ」（西語の敬称）と皮肉って欲しかった。



「日本に関税をかけたらどうする？」に対し「仮定の質問には答えられない」ではなく、「日米両国の信頼関係においてそれは起こらない」と答え握手で締めて欲しかった。来月で14年となる福島原発事故。23年11月に燃料デブリを0.7グラム取り出した。日本の技術力や忍耐力あってこそだ。チェルノブイリやスリーマイルではデブリ取り出しの技術も無いし諦めてしまっている。ただ880トンものデブリ、どう考えても廃炉、更地にするなど不可能だ。国が土地を買い上げて永久にデブリを冷やし石棺で覆うしかない。同原発の処理水は国産多核種除去設備を開発して生態系リスクゼロ基準である。海洋放出前にその説明を中国にしておけば不要な反発も無かっただろう。同原発は1000年後、更地にできるがその頃の地球は人類居住可能だろうか。あるいは人間の方が灼熱や極寒にも耐えうるサイボーグと化しているかも。米国のパリ協定離脱やアラスカ資源開発で地球を痛めるのは無責任の極みである。日本は脱炭素化に向けて欧州やアジアと連携強化すべきでありパイプラインを作って（あげて）米LNGを購入せずとも良い。地球沸騰化の夏はもう懲り懲りだ。

表題の「自分の人生、自分に賭ける」とは私の好きな言葉。他人と比べて悲観しない。人間同士の知恵の格差といっても、人間とチンパンジーほど差はない。誰もがアインシュタインになれるのだ。「宇宙からの帰還（立花隆）」といった良書をたくさん読む。最近の本欄では大野（慶太）氏が運行管理者を、岩村（龍一）氏が経営者を、加藤（博和）氏が自動運転を、それぞれ応援する内容で非常に共感した。CASEという技術と人知、DX・GXデータ科学を結集する。人・モノの移動に加え、人の心が動く社会が実現できる。身体・認知機能、価値観等多様な個性に対する最大公約数的な技術開発は日本の得意分野。だがそのみではさまざまな社会課題対応は困難である。「火星に行くぞ!」というイーロン・マスク氏のような突き抜けた個性も必要だ。トヨタ、GO、筑波大学未来社会工学など益々注目が必要。「はたらく細胞」のように、現場で働く人々の幸せ第一に今日も休まず動く。